

諦めない

与えられた仕事を精一杯するためには、諦^{あきら}めないこと。総じて、世の中の事は意のままにならないことが多い。だが、一旦志をもって事に当たった以上、少しの可能性でもある限り諦めてはならない。

関ヶ原の戦いに敗れて捕らえられた石田三成は、京都の六条河原の処刑場に引き出されて行く時、喉^{のど}が渴いて警固の武士に湯を求めた。あいにく水がなかったために、兵士は三成に干柿をよこそうとした。ところが三成は、「干柿は痰の毒だからいらぬ」と断った。警護の武士たちは、「これから打ち首になる人間が毒を気にするとは何ということだ」と大笑いをした。すると三成は、「大義を思う者は、首を刎^はねられる最後の瞬間まで命を大事にし、何とか本意を達しようとするものだ」と言い放って、無礼な武士たちを睨^{にら}みつけたという。

松下幸之助は、「失敗の多くは、成功するまでに諦めてしまうところに原因がある」(『指導者の条件』p 75) と述べている。また、渋沢栄一は、「一度従事した仕事は、これを完成するまでは止めぬという心掛け、即ち忍耐力が肝要である」(『渋沢栄一訓言集』p 81) と語っている。

忍耐力を養うには、困難は自分を高める試練であり、乗り越えられない試練はないと信じて、為すべきことを日々為すことである。忍耐を専一として撓^{たわ}まず、折れず、間断なく進むときは、意志が次第に強固になり、心を擾^{みだ}されることもなくなるのである。

サントリーの創設者である鳥井信治郎の下に家業を継いだ佐治敬三が訪ね、ビール製造の決意と企画を打ち明けた時、鳥井は「やってみなはれ」と言った。細心に細心を重ね、起り得る一切の事態を想像しておけ、しかし最後は踏み切れ、賭けろ、賭けたら怯^{ひる}むな、徹底的に食い下がって離すな—それが「やってみなはれ」の持つ意味であった。

忍耐とは我慢することのみを意味しているのではない。賭けを突破する勇気の裏返しでもあり、その勇気なくして人の一生に大きな輝きはないのである。